

ナチュラル・ウーマンとその子どもたち

兒島 峰

はじめに

2015年、渋谷区や世田谷区は、同性カップルを公認する方針を打ち出した。そして、2018年7月2日には、お茶の水女子大が、戸籍上は男性でも自身の性別が女性だと認識しているトランスジェンダーの学生を2020年度から受け入れる方針を明らかにした。

このように、日本でも性のあり方の多様性が社会的に認められるようになってきている。しかし、一方で、女性を取り巻く環境に関してはどうか。

日本の複数の医学部において、長年にわたって女性の合格者を阻むための作為的な操作が行われてきたことが発覚したのが、2018年のことである。また、戦前と同様、女性を単なる「産む機械」だととらえる発言が日本の国会議員から定期的に飛び出していることは、周知のとおりである。一例を挙げれば、東京オリンピック・パラリンピック競技大会担当大臣やサイバーセキュリティ担当大臣を務めた経験もある自民党の桜田義孝議員が、2019年に結婚しない女性を批判して、「お子さんやお孫さんにぜひ、子どもを最低3人くらい産むようお願いしてもらいたい」と発言し、それ以前の2017年にも、自民党の山東昭子議員が、「子供を4人以上産んだ女性を厚生労働省で表彰することを検討してはどうか」と意見していた。

日本の医学部による女性に対する組織的犯罪は、高収入と重い責任が約束される専門職から女性を排除するという日本社会の女性に対する人権侵

害の構造を現している。日本では女性の社会的役割は否認されるか、よくても男性に比べて軽視される傾向にあり、社会から排除された女性が行き着く先として想定されているのが、家庭である。医学部における女性排除問題と自民党議員発言に見られる時代錯誤な考え方は、実は根底においてつながっているのである。

男女平等に関して、日本は国際的にみてもほぼ最低のランクに位置づけられており、賃金格差や、影響力を発揮できる重要なポストに占める女性の割合の低さ、また、実質的に女性のみで改姓を強いる夫婦別姓を認めない日本の民法に対しては、国連から改善勧告がなされているほどである。

日本社会において女性は、控えめに言っても、男性の付属物、率直に言えば、「産む機械」以上の役割を期待されておらず、女性の多様な生き方というものが社会的に否認されていることが、あらゆる機会に露呈する。

しかし、性別二元制に基づいて「女性」であることをアイデンティティとして選択する女性であっても、当然ながら、その生き方、感じ方は多様であるはずで、また、自身の性を自認する時期も一様ではないはずである。

多様な性のあり方が社会的認知を獲得しつつある一方で、性別二元制に基づく女性の、当の女性自身による性認識の多様性は、どの程度認知されているのであろうか。

本稿では、社会が求める規範に違和感を覚える日本女性の可能性について、デビュー初期の段階から一貫して、性器結合主義と異性愛規範とは別の形の関係性をテーマにしている松浦理英子の作品を通じて検証する。

松浦理英子は、1978年に発表した『葬儀の日』で第47回文学界新人賞を受賞し、同作品で芥川賞候補にもなった。これが、松浦が20歳の時である。その後も、『ナチュラル・ウーマン』、『親指Pの修業時代』、『犬身』といった作品を発表し、2017年には5年ぶりとなる長編小説『最愛の子ども』で泉鏡花賞を受賞した。

日本におけるジェンダーやフェミニズム、男性学といった領域に関しては、上野千鶴子、武村和子、牟田和恵、田嶋陽子、伊藤公雄らの優れた先行研究が多数ある。すべての学問研究は日常の社会生活と深くかかわるものだが、特にジェンダーについては、日常のあらゆるシーンにまわりつ

くという性質上、論文のなかで、「ブス」だの「ケツ」だの「オッパイ」だの、他分野の論文ではほとんど目にする事のないような、話し言葉や、猥褻であったり過激であったりするような表現もしばしば見受けられるが、これは、新聞や雑誌広告、テレビ・コマーシャルといったメディアなど、生活するにおいて否応がなしに目にするものが、個人のセクシュアリティの構築に、本人が意識しようがしまいが、多大な影響を与えるからである。

女性は、自身が性を自覚するよりもはるかに早い段階から、その外見によって、他者から身に覚えもなければ欲しているわけでもない価値を付与される。

この点に極めて自覚的に取り組んできたのが、松浦理英子である。

冒頭に挙げたように、日本社会における女性に対する認識はほとんど変わっていない。しかし、女性のほうはどうであろうか。

多様な性のあり方がわずかであろうと認識されるようになったのであれば、最大の性的マイノリティともいえる女性も、また、変化しているのではないだろうか。

本稿では、女性たちの繊細で微妙な性に関する心理的变化と、既存の異性愛とは異なる自由な性のあり方の可能性を探るために、純文学で取り上げられる登場人物の描かれ方、および、社会における作品の受けとめ方がなんらかの糸口となるのではないかと考え、異なる時代における女性たちの「戸惑い」を描いた二つの松浦作品をとりあげる。

本稿で扱うのは、「女性」であるというアイデンティティが本人のなかに芽生えるより前に、「女子」「女子高校生」「女の子」といったアイデンティティを他者から強制されることに対する異議申し立てから始まる『最愛の子ども』、そして、同作品の親世代である女性たちの葛藤を描いた、1987年発表の『ナチュラル・ウーマン』である。

第1節では、『最愛の子ども』の概要と、同作品の執筆に至った経緯を記述する。『最愛の子ども』は、『ナチュラル・ウーマン』の子世代の物語と位置づけられていることから、第2節では『ナチュラル・ウーマン』を紹介する。第3節では、両作品で描写される登場人物の外見によって他者

から付与されるイメージと、それに無自覚な主体とのギャップについて検証し、最後に、ジェンダーのカテゴライズと、ジェンダー・アイデンティティが確立する前、未確定期間である、いわゆる「揺らぐ」ジェンダー・アイデンティティと社会的抑圧についてまとめる。

なお、本文中に引用した括弧「」の後の [] 内の数字は、扱っている作品のページ数である。

1. 『最愛の子ども』

『最愛の子ども』は、神奈川県内にある、男女共学ではあるが、男子と女子のクラスが分かれている私立高校に通う女子高校生が主人公である。高校生たちは、クラスメイトのひなつを「パパ」、ましおを「ママ」、空穂を二人の子どもである「王子様」によって構成される疑似家族を設定し、作品は現実と空想を交えてストーリーが展開されていく。

本作品着想のきっかけについて、作者の松浦は、まず、真汐を、「大人や男性からすごく嫌われる存在」としたうえで、そういう子どもが実際に殺害された、2005年の宇治学習塾小6女児殺害事件¹に衝撃を受けたこと、そして、作者の松浦自身が、嫌な大人には嫌悪を隠せないタイプの子どものだったので、自分自身も、実際に殺害された児童のように、殺されていたかもしれないと思ったからだとして述べている²。

¹ 2005年12月10日に発生した事件で、大学4年生のアルバイト講師が、計画的に12歳の女児を凄惨な形で殺害したというもの。犯人は、この事件以前にも他の女子生徒にセクハラ行為をしていたという報道もあり、加害者にしつこく接近されるのを嫌がった被害女児を殺害したという、いわば、ベドフィリアによるストーカー殺人だったことが後に報道されたが、松浦がショックを受けたのは全容が明らかにされる前の段階で、被害者の女児が、アルバイト講師に対する嫌悪感を隠さなかったことから犯行に及んだという報道だったという [2017 <https://bunshun.jp/articles/-/2312>]。つまり、大人の男性に対して嫌悪感を明らかにしたために殺害されたことにショックを受けたということである。

² 瀧井朝世による松浦理英子へのインタビュー記事 [2017/04/29付 文春オンライン <http://bunshun.jp/articles/-/2312>] より。

その、大人や男性から嫌われる真汐が書いた、「女子高校生らしさとは」という学校で出された課題作文から、作品は始まる。

「女子高校生」だけに与えられ、男子クラスの生徒には与えられていないこのような課題によって、他者から押しつけられる「女子高校生」というカテゴリーに関する問題点を指摘する率直な文章である。

真汐は、「いったい何を求められているのかわかりません」[8]、「単に時期が来たので進学しただけです」[8]と正直に述べる。そのうえで、「女子高校生の性的非行について熱く語るおじさんたちの表情は、どこかしら取りのぼせていて、わけもなく気持ちよさそうで、真心から女子高校生のことを心配しているのではなく、何と云うか、なつかない小動物をしつこくかまって楽しんだり腹を立てたりしているように見えるのです」[8～9]と続ける。

この作文のせいで職員室に呼び出された真汐を待っているクラスメイトも、心配して、日夏に、夫として真汐に要領よく生きるすべを教えたらどうかと言うが、日夏は、真汐の意固地なところがいいのだと言い、その性格ゆえにずたずたに傷つくところが見たいとまで言っている。

このような残酷なことを口にする日夏は、気に入った人にサービスするのは好きだが、決して全身全霊で愛することはない「冷淡な奉仕者」³である。二人の子どもとされる空穂は、母子家庭で、看護師の母と二人の生活を送っている。幼少期に母に投げ飛ばされたせいも、「頭のねじが1、2本抜けている」[64]のではないかと噂されるような人物で、小動物的なキャラクターで場を和ませる、ムードメーカーのような存在である。

男子クラスは、鞠村という端正な顔立ちで着こなしも上手な生徒が権力者として君臨している。この鞠村は、「ネットのアダルト・サイトは見るから性欲の対象は女性みたい」[85]だが、女性に対しては「背筋が凍るくらい冷酷」[85]に批判をしており、クラスメイトからは女嫌いともな

³ 瀧井朝世による松浦理英子へのインタビュー記事 [2017/04/29付 文春オンライン <http://bunshun.jp/articles/-/2312>] で松浦自身が日夏を「冷淡な奉仕者」と評している。

されている。鞠村は、自分以外の男子が同じ学年の女子に好意を示しただけで、機嫌が悪くなる。

鞠村は、子どもじみた方法で女子クラスの疑似家族、特に、日夏にちょっかいを出したこともあった。日夏に対して、あたかも恋の告白でもするかのように呼びかけ、ラブレターと見せかけて、インターネットからダウンロードしたらしい醜悪な「エロ画像」を手渡したのである。

しかし、女子クラスの生徒たちは、男子クラスよりはるかにうわてだ。美織というクラスメイトがいるためである。

大学教授である美織の父親はエロティック・アートの愛好家で、両親が留守のときに、インターネットなどで閲覧可能な、「汚らしくて気持ちの悪くなる」[78] ようなものとは異なる、「質と品を保った作品」[78] を日頃から鑑賞する機会に恵まれているのである。

エロティック・アートを鑑賞する性交未経験の彼女たちは、「性の分野でも新しい嗜好、新しいプレイなんてもう見つけられないのかな」[80]、「がんばって見つけてよ」[80]、「見つけたら教えてね」[80] などと、屈託ないおしゃべりを楽しむ。

疑似家族を構成する高校生たちは、空穂の母親が夜勤の時などに3人で空穂の家に泊まり、パパとママの間に空穂という形で、川の字になって寝ていた。しかし、ある日、真汐は、日夏と空穂の二人だけで愛撫が完結していることを感じてしまう。

こうして、パパである日夏と王子様の空穂が、真汐抜きで二人だけの戯れを始めたことで、次第に関係に変化が生じる。

真汐は、周囲に対して常に鎧をかぶっているような少女で、自分の弱みを人に悟られまいとしている。この性格ゆえに、疑似家族において疎外感を抱くようになって、傷ついているようなそぶりは決してみせようとしない。

そういった心理について、真汐は、自分でも「同級生たちに〈パパとママ〉と呼ばれているとおりにこの人が私の伴侶だ」[140] という確信はあるものの、一方では、「日夏に手もなく籠絡されてしまう自分がふがいないくて、くやしくて」[140] たまらないし、「手綱を握っているのは常に日夏」

[140] で「飼いならされているのがわたし」[140] と、主導者がもっぱら日夏であることが「たまらなくくやしい」[140] と吐露する。日夏が空穂と二人で自分のもとから去っていくことを恐れ、「だから、わたしは日夏とも空穂ともいつでも離れられるように心を鍛える。生涯たった一人でも生きていけるように心を鍛える」[142] のである。

日夏と空穂との親密な関係は、真汐を排除する類のものではなかったにせよ、真汐は、自分から二人と距離をおく。

無邪気な性格の空穂は、相手を気持ちよくさせることに長けている日夏との、二人だけの戯れを堪能する。

ある日、空穂は、日夏と唇と唇とのキスをしたいと申し出る。一瞬、躊躇する日夏だが、空穂の積極的な姿勢に興味をいだき、空穂が日夏にキスするのを許した。

何度かしてみたいという空穂のキスを日夏が受けとめているとき、夜勤だったはずの空穂の母親が帰宅し、現場を目撃してしまう。

空穂の母親は、「娘を変質者と同じ学校に通わせたくない」と学校に乗り込んでいく。

空穂は、自分から誘ったのに、なぜ、日夏が自分を誘惑したかのように騒がれるのかと不思議に思うが、真汐が言う通り、それは、やはり「見た目のせい」だということになった。

空穂の母親のあまりの剣幕に、学校側も何らかの対応を取らざるを得なくなり、結果として、日夏を無期停学処分とした。

日夏は、自分の姉と空穂の母と一部の教員が日夏をレズビアンだと決めつけるが、自分の実感とは違うと違和感を口にする。

日夏の気持ちは、こうだ。「もしかしたらこの先自分をレズビアンだと思う日が来るかもしれないけど、それはもっといろんな経験積んでからのことでしょ。ありがちなことばで今決めつけたくないんだよね。でも、あの人たちの世の中にはレズビアンとレズビアンじゃない人の二種類しかなくて、その二種類がくっきりきれいに分かれるんだと信じてるみたい」[198～199]。

美織の母親がかつて同性愛者だったであろうことを知っている彼女たち

は、日夏を非難する「あの人たち」の意見を、単純すぎると批判する。

そのような状態の日夏に声をかけたのは、やはり、美織の両親であった。

美織の両親は、日夏に、日本の高校を自主退学し、高校卒業認定試験で大学入学資格を得て、外国の大学へ進学してはどうかと勧める。また、海外にいる美織の父親の親しい友人の協力も保証した。

自分を取り巻く環境の急激な変化に戸惑う日夏に、美織の母親は、大学時代に性のバラエティが日本よりはるかに豊かな米国に憧れたこと、今の日本のセクシュアリティ・シーンは、社会的受容はどうあれ、少なくとも当時よりは多彩になっていると、自身の経験を交えて、日夏を勇気づける。美織の父親が妻に、「きみが日本を離れなかったおかげで日本のセクシュアリティ・シーンがより多彩になったんだよ」[205] と言うと、日夏の心になにか響いたようで、自分も日本のセクシュアリティ・シーンの未来の一端を担うものの一員だと自覚すると言う。それに対して、美織の両親は、一旦、外国に行ってから戻ってきて、日本のセクシュアリティ・シーンの未来を担えばよいのであって、ひとまず、闘う価値のないものと闘うより、自分の可能性を広げるために外国に行ってはどうかと助言する。

受験を終えた真汐は、高校生活を振り返り、また、外国へ進学する日夏を思う。真汐は、「わたしは意固地で可愛げがなくいろいろな人と衝突する誰からも羨ましがられない性格だから、これから何十年生きても日夏のようにわたしを面白がってかまってくれる人には二度と出会えないと思うけれど、日夏はいずれまた興味を惹くかまいがいのある人物に出会うだろう」[212] と想像し、胸苦しくなる。そんな自分に対して、「まだまだ心の鍛え方が足りない」[212] と反省するも、「心を鍛えるだけでは幸せに生きて行くのに充分ではない」[212] ことも自覚している。

その真汐は、最後に、こう考えるのだ。

「いったいどれだけ賢ければ波風立てずに生きて行けるのだろうか。いったいどれだけ美しければ世間に大事にされるのだろうか。どれだけまっすぐ育てばすこやかな性欲が宿るのだろうか」[212～213]。

以上が、『最愛の子ども』の概要である。

日夏については、作者の松浦自身も、あれほど格好の良い子はいないだ

ろうと告白するほどで⁴、男子生徒たちのからかいにも動揺せず、毅然とした態度で応じる、女子高校生という実際の年齢より若干発達している存在である。

前述したインタビュー記事における松浦自身の発言からも、『最愛の子ども』は、自他共に認める「可愛げのない女子高校生」の存在を肯定するという意味があることがうかがえるが、同時に、真汐の作文の言葉を借りると、「なつかない小動物」、すなわち、社会から「弱い存在」とみなされ、庇護される愛玩物であるべきという役割を付与された存在としての女子高校生たちが、庇護者を標榜するものに依存せず、自分たち自身の物語を紡いでいく様子を描くことで、他者から強要されるのではない自分自身の人生を歩む可能性を提示しているといえよう。

次節では、『最愛の子ども』の親世代、美織の両親の世代と位置づけられる、1987年に発表された、同じく松浦理英子の『ナチュラル・ウーマン』を紹介し、社会が女性に押しつけるイメージに違和感を抱く30年前の女性たちの様子を探る。

2. 『ナチュラル・ウーマン』

短編集『ナチュラル・ウーマン』には、『いちばん長い午後』、『微熱休暇』、および、表題の『ナチュラル・ウーマン』が掲載されている。この掲載の順番は発表された順番と同じであるが、三作に共通する主人公、容子の経験の順番は、『ナチュラル・ウーマン』が最初で、次に『いちばん長い午後』、最後が『微熱休暇』となる。

この節では、容子と対照的な外見と経験をもつ花世との恋愛を描いた『ナチュラル・ウーマン』を中心に紹介するが、容子の容姿に関する記述を補完するために、『いちばん長い午後』と『微熱休暇』も参照する。

『ナチュラル・ウーマン』は、容子が同人漫画誌サークルで9か月のあ

⁴ 瀧井朝世による松浦理英子へのインタビュー記事 [2017/04/29付 文春オンライン <http://bunshun.jp/articles/-/2312>] より。

いだ恋焦がれ続けていた花世と、はじめてキスするところから始まる。容子にとっても、花世にとっても、男性とキスをした経験はあるが、女性とキスをするのは初めての経験である。互いに相手を探るように、女性との経験はあるのか、男性との経験があるのかとたずねあう。

花世は、「肩まで伸びたまっすぐで艶のある髪」[120]と、「常に潤っていて何かを待ち受けているような官能的な瞳」[118]という印象的な顔立ち、そして、「色白とは言っても白すぎはしない品のいい象牙色の肌」[141]と、「滑らかな輪郭、光が当たると女らしい影の差す胸や腹部」[141]といった女性らしい体つきをしている。

その外見から、花世に求愛する男性は後を絶たず、サークル内だけでも、9か月の間に5人の男性から求愛されている。そのうえ、「自分に熱を上げている男を平然と捨てる冷酷さ」[118]も持ち合わせている。

容子が花世と交際するきっかけとなったのは、サークルで、花世と性交したという男性に、容子が、「それじゃあ、わたしとも寝て」と頼んだことが、サークル仲間の圭以子に知られたからであった。圭以子は、「好きな人と関係をもった男性と自分が関係をもつことで間接的につながろうとするなんて情けなさ過ぎるわよ」[123]と、なかなか花世に告白しない容子を叱責し、自分の感情を吐き出さないと欲求不満になり、「不感症なのに男を漁って歩くニンフォ・マニアになる可能性なきにしもあらずね」[122]とたきつけ、それを花世が聞いていた。

容子の気持ちを圭以子が代弁したことから、花世は容子と交際を始める。そして、初めて肌を合わせたとき、花世は、初めて自分にも性欲があることを実感したというのであった。

小説のタイトルになっている「ナチュラル・ウーマン」とは、ソウル歌手アレサ・フランクリン (Aretha Franklin) が1967年に発表した楽曲で、「あなた」に出会うまで、単調でつらい毎日を送っていた女性が、「あなた」と出会うことによって「ナチュラル・ウーマン」(歌詞の日本語訳では、「ありのままのわたし、ひとりの女」と訳されることが多い)と感ずることができるようになったと、パートナーに出会うことで生きる喜びを得た心情を綴ったものである。小説のなかでは、アメリカ合衆国における奴隷解放

前後を漫画作品のテーマにしている花世が、容子を抱きしめたときに生まれて初めて自分が女だと感じたと言告白する際に、アレサの曲が象徴的に用いられる。

花世は、容子に、「私、あなたを抱きしめた時、生れて初めて自分が女だと感じたの。男と寝てもそんな風に思ったことはなかったのに」[159]と告白する。大勢の男と性交してきた花世が、容子を抱きしめたとき、初めて、「ナチュラル・ウーマン」、もしくは、「ありのままのわたし、ひとりの女」だと実感できたというのである。

花世は、16歳から男性と性交し続けてきたという。しかも、男性に対して性欲ももたず、むしろ、「つまらない」と思いながらも男性との性交を続けていたというのである。

なぜ、つまらないと思いながらも男性と性交し続けてきたのかと容子がきくと、花世はその理由を、「女である以上はやらなければいけないもの」だと思っていたからだと言った。

容子は、花世が女だと感じるができないまま、男性と性行為を繰り返していたことを知り、「乾布摩擦のような」虚しい行為を続けてきた花世を痛ましく思う。

二人は、交際を深めていくなかで、二人に合った性行為を発見するに至る。

主導権を握るのは常に花世であった。容子が、自分も花世に尽くしたいと思って花世の性器に触れようとすると、「男の垢に塗れた陳腐な自分の性器」などに触ると容子の「手が腐る」と言って、触れさせない。そして、男女の性交は「ままと」であり、「男と女ごっこ」[154]とすら言う。

二人の関係は次第にサディスティックな様相を呈していく。

ある日、容子とのデートにあらわれた花世の胸に、キスマークがついていた。

容子は、花世の行動を束縛しようとは思っていないが、一週間前からの約束であったデートの前日か前々日かに、明らかに、男性と性行為をしていることを容子に見せつけるために唇の跡をつけさせた花世の残酷さに打ちのめされる。かつては、「男の垢に塗れた陳腐な自分の性器」などに触

ると容子の「手が腐る」と言って触れさせなかった花世が、胸のキスマークを見て言葉を失う容子に対して、「ちょっと性器を提供してきただけじゃない」[184]と言いつつ、「この上からあなたが印をつけたらどう」[185]と挑発するのである。

ついに二人は互いに別れることを決意する。

別れる際、花世は容子に、「あなたと会ってナチュラル・ウーマンになった、と言ったわよね、昔？」[207]と自分の発言を確認し、「あなたはどうかしら？ いつかナチュラル・ウーマンになるのかしら？ それとも、そのままナチュラル・ウーマンなの？」[207]と問う。

花世のこの問いに対し、容子は、考えたことがないと言葉を返すので精一杯であった。

なぜなら、容子は、「自分が何なのか、いわゆる〈女〉なのかどうか、私には分からない。そんなことには全く無関心で今日まで来た。これからだって考えてみようとは思わない」[207]のである。

3. やはり「見た目のせい」なのか

『最愛の子ども』の冒頭に登場する真汐の作文は、日本社会において、女性のみが他者から商品価値を付与されること、および、その商品価値が、本人の自覚よりはるか以前に刷り込まれることを暴いている。

真汐がその作文のなかで率直に述べているように、社会は、そして、真汐の場合には学校までもが、「女子」高校生としての自覚を強要するのである。

それでは、社会が希望する、保護者を必要とすることを強要される、いわゆる「可愛らしさ」とは、どのようにして求められるようになったのであろうか。

今田絵里香は、「少年」「少女」雑誌の誕生とその変遷を追うことで、今日では「自然なもの」ととらえられている「男の子らしさ」と「女の子らしさ」がいかに作為的に構築されてきたのかを分析している [今田 2019]。

今田は、近代学校教育制度の誕生をきっかけとして、それまで区別され

ていなかった「子ども」と「大人」が区別されたと述べる [今田 2019]。ある一定の年齢になると、国家が制定した学校に強制的に入れられ、大人とは異なる時間を過ごすようになることで、「子ども」が創出された。「子ども」とは、1872年（明治5年）以降に創出された概念なのである。

そして、1879年（明治12年）の教育令で中等教育機関における男女別学が定められると、「子ども」は、「少年」と「少女」という二つのカテゴリーに分けられることになった。

しかし、戦前における理想の少女像は、「才色兼備のお嬢さま」であり、理想的行動は「少女を助ける」というものであった [今田 2019]。この頃、女性同士の恋愛が少女雑誌で取り上げられることは、珍しいことではなかった。

それが、戦後になると、保護者にかわいがられる少女が理想とされ、少年を助けるのが理想的行動とされるようになる [今田 2019: 460]。

愛玩具のような少女が理想とされるのは、戦後になってのことだったのである。

松浦理英子の作品では、いずれも、登場人物の外見にまつわる描写が丁寧になされている。そして、その作品のなかで、真汐は、性格も可愛げがないが、顔も可愛くないのである。

真汐がそれを自覚させられたのは小学生の時に、親戚が集まった際、弟の光紀と比べられ、「真汐も光紀みたいな顔だったらよかったのにな」 [93～94] と言われている。そのとき、真汐は、そうなのかと素直に考えただけだったが、周囲の女性陣が、いっせいにその発言をした伯父を責め、「真汐ちゃんは成長するにつれてどんどんきれいになるタイプよ」 [94] などととりなしたため、「どうやらひどいことを言われたようだ気がついた」 [94]。

真汐自身は、外見上の不美人さより、性格的な可愛げのなさの方に自覚的であるが、一方、真汐たちが通う高校には、天使のような美貌の持ち主も登場する。

苑子というその同級生は、顔は天使のようだが、心が乏しいとクラスメイトから言われる。感情がないのである。人間らしい感情がないため、他

人に対しても冷酷である。しかし、故意に相手を傷つけようとしているのではなく、感情に乏しいので、相手が傷つく可能性に思いが至らないのである。

苑子は、男子クラスの古見という生徒から交際を申し込まれ、承諾する。

それまで、何人もの男子に交際を申し込まれても断っていたことから、クラスメイトは、「ついに人間性に目覚めたのかな」[138]と驚くが、苑子は、古見という生徒とは話したこともないが、高校時代に男の子とつき合った思い出がひとつくらいあってもいいだろうと思い、つき合うことにしたという。

そのような苑子なので、いつの間にか、古見から、男子クラスの番長である鞠村に乗り換えていた。

クラスメイトは、「乗り換えられた古見くんがかわいそう」[165]と同情するが、苑子は、「かわいそうだけど、しかたのないことでしょ。世の中そんなことよくあるよ。全部が思い通りになんか行かないよ」[165]と、まるで他人事のように言う。

この発言は、「心の乏しい」苑子ならではの発言として、クラスメイトたちに受け入れられる。

しかし、心が乏しいと理解していても衝撃を隠せないシーンが出現する。それが、美男美女のカップルである苑子と鞠村との、いわゆる「いちゃいちゃする」シーンであろう。

学園の隠れた名所で「二人はいちゃいちゃしていたのだが、奇妙なことに二人とも無機質な無表情で、愛や欲望に酔っているようでもなければ楽しそうでもなかった」[181]、「やりたいことを自然にやっているのではなく、恋人同士がやるだろうことを一通りなぞっているというふうで、体温も鼓動も平常通りなのではないかと疑われた」[181～182]というのである。

視線を感じたらしい鞠村が真汐を見るが、その目つきは、真汐の弟である「光紀以上に冷たく全く好意の感じられない」[182]ものであった。

見られていることに気をよくした鞠村は、真汐に対する挑戦のように、苑子の耳のあたりに自分の口をこすりつけるのであるが、「人の目を意識

せずにいちゃついていたさっきとは打って変わって生き生きとした表情[182]になる。一方の苑子は、相変わらず、特段、嬉しそうでもなければ、迷惑そうでもなかったという。

この異様な光景に、真汐と日夏は、「気持ち悪い以外の何ものでもない」のに、その異様さ故に、足がすくんで動けずにいる。

「いちゃいちゃ」しているのは、美男美女のカップルである。本来であれば、映画のワンシーンのように美しいはずだ。しかし、苑子にも鞠村にもまったく感情が感じられないがゆえに、「気持ち悪い以外の何ものでもない」し、奇異に映る。

鞠村の方は、見られていることで興奮するが、苑子は、見られていても、見られていなくても、まったく変わらない。

この場面の苑子は、『ナチュラル・ウーマン』の花世を想起させる。

花世も、また、好きでもない行為を、「女であるからには当然」するものとして、続けていた。そして、花世が好きでもない異性との性交を繰り返してきたのは、花世が美しいからでもある。

花世は、「女である以上は男と性交しなければならない」という異性愛主義を、自身の性アイデンティティが確定する前に、すでに、周囲から刷り込まれていた。しかし、これは、花世個人の問題ではない。

近代日本で発見された異性愛に基づく恋愛は、能動的な役割を男性に、受動的な役割を女性に当てはめることによって成立している。日本では、女性はそもそも性的な欲望があってはならないと思わされているため、相手が同性であろうと異性であろうと、「性的な関心を抱く女性」を想定するのは不可能なのである[掛札 2009 (1992)]。それでは、性的欲望があってはならないはずの女性は、なぜ、男性と性交するのだろうか。

2017年6月、性犯罪に関する刑法が110年ぶりに改正され、強姦罪は強制性交等罪という罪名に変わった。しかし、明白な暴力や脅迫を伴わない限り、強制性交は同意とみなされており、刑法改正の意義を問う声が噴出している。110年前、すなわち、明治時代と同様、夫婦間の性暴力はないものとされており、女性は男性の性欲を満たすことを強要されている⁵。

主体となるのは常に男性で、夫婦間のレイプが合法とされる日本社会に

において、女性が男性からの誘いに応じることは、社会的強制力をもっているといても過言ではないであろう⁶。しかも、花世にとって不幸なことに、彼女は外見が非常に魅力的なのである。その「見た目のせい」で、花世に求愛する男性は、後を絶たないのである。

日本社会に特徴的な、家父長制に基づく異性愛規範によれば、女性は身体的に男性にとって望ましい性的価値をもっていなければならないが、したがって、美しくなければならない [上野 2009]。つまり、「〈美〉とは女性にとって特権ではなく、強制」 [上野 2009: 18] である。

しかし、その強制は、能動的な男性と、ただ男性を受け容れるだけの、性欲をもたない女性という家父長制に基づく男女の異性愛構造を前提としている。

花世のように、はからずも男性からみて女性的で官能的な美しさを備えた女性は、自分が性に無自覚であろうがなかろうが、近代日本が強要する異性愛規範に陥落する。

花世が求愛する数々の男性の求めを片っ端から拒むことができなかったのは、日本社会が女性に男性の求めに応じるように強制しているからであ

⁵ 刑法改正前の2007年、広島高裁と東京高裁が妻を強姦した夫に強姦罪を適用しているが、いずれの場合も、離婚を想定した別居状態にあり、事実上の夫婦関係が破綻していることが強姦罪適用の理由となっている。このことは、夫婦関係が破綻していない同居夫婦の間では、妻の同意なしに夫が性行為を強要できることを認めていることを示す。

⁶ 松浦理英子の『ナチュラル・ウーマン』は、1994年と2010年の二度にわたって映画化されている。このうち、脚本に松浦自身が参加している、1994年版の佐々木浩久監督作品では、花世が経験した異性愛がいかに花世にとって苦痛であったかが、より丁寧に説明されている。花世は、男性との性交について、「中途半端なSMのようで」「つまらない」と発言し、花世が次々と男性と別れる理由について、「男相手だと、いろいろ我慢しなけりゃいけないことがある」と言う。映画のなかの花世は、一人の男性と3か月もたたないうちに別れる理由についても、「我慢できないからすぐに別れていたんじゃない」と説明している。小説では、「自分に熱を上げている男を平然と捨てる冷酷さ」 [118] と表現されているが、その実態が、我慢できないほどの苦痛であったというのであれば、耐えられないほどの苦痛を伴いながらも自分を傷つけることしか選択肢がなかった花世の人生は、さぞかし壮絶だったであろう。

る。決して、花世個人の責任ではない。

好むと好まざるとにかかわらず美しく生まれてしまった花世には、不幸にも、応じなければならぬ多くの機会が与えられた。ここで言う多くの機会とは、花世にとっての強制である。多くの強制に、花世は、応じなければならなかった。

花世の「見た目」が、花世が自分の性を自認することの障害になっていたのである。

花世とは対照的に、容子は、その外見のために、自分の意思に反することを強制される機会をさほど持たずに済んでいる。

容子は、サークル仲間から「小僧」と呼ばれ、「女性ホルモンを注射したゲイ・ボーイみたいな胸」[136～137]で、性交した男性から、「男の子を抱いている気分」[いちばん長い午後：36]だったと言われるような体つきをしている。このためか、容子は、花世のように執拗に男性から求められたことはない。一度か二度デートすることはあっても、その後は相手の方から離れていく。

容子が主体的に人を好きになり、その結果、「生れて初めて肌を合わせた相手が熱愛する人間であった時の全身が破裂するかと思えるほどの感動」[微熱休暇：71]を味わうことができたのは、花世と違って、他者から干渉されにくい「見た目」のおかげでもあった。家父長制に依拠する異性愛規範において求められる「強制された美」から自由だったからこそ、自身の性の主体を維持できたのである。

容子が、「たまたま女に生まれてついでに女をやってるだけ」[136]で、「ついでの部分のことなんかどうでもいい」[136]と思うことができるのは、やはり、容子の「見た目のせい」なのである。

ここで、『最愛の子ども』の苑子に戻ってみよう。

異性愛規範において強制された美貌をもっている苑子は、やはり、幸せそうではない。苑子を可愛いと褒めたたえるクラスメイトに対しても、自分の外見しか褒めないと言う。

それでは、苑子もまた、将来、花世のように、男性からの求愛を拒むことができずに苦しむのであろうか。

苑子は、「強引に触ってくる上に触り方がしつこい」[203] のが嫌で、鞠村と別れる。すると、鞠村に苑子を取られた古見が、鞠村を殴るのである。すぐに、「鞠村派」による報復が始まるものと思われたが、この事件をきっかけに鞠村の権威は失墜し、取り巻きからも見捨てられ、鞠村は孤立する。それについて、苑子は、「いいことばかりは続かないよ。栄枯盛衰だね」[203～204] と、相変わらず、まるで他人事なのである。

この話を聞いた日夏は、「苑子最強」[204] と笑う。美織も、「心が乏しければ乏しいほど強いのかもね」と同意する [204]。

心が乏しい苑子は、男性からの求愛なども容易に拒むことができるであろう。花世のように苦しむことは、ないであろう。他者への共感力がない苑子には、異性愛における性の受動者であれという強制から逃れるという可能性が残されているのかもしれない。

他人の感情に疎く、人間性に欠ける美少女、苑子が「最強」だという認識の共有と、作品の最後を飾る真汐のつぶやきは、傷つきやすく、人間らしい、もろくて壊れやすい心をもっている自分たちを否定しているのか、それとも、叱責しているようでもある。しかし、真汐は、心を鍛えて動じない人間になろうと一旦は決意したものの、日夏と過ごした日々を思い出し、さまざまな感情に浸り、かつて日夏とした約束を思い出し、微笑む。くやしかったり、嬉しかったり、胸をしめつけられるような自分の感情をいつくしむ。

人間らしく、傷つきやすい女子高校生に話を戻そう。

「見た目」が良い苑子には、女性のファンもおり、苑子が通学する美しい姿を眺めるため、毎朝、定位置で待つ。苑子の可愛らしさにはしゃぐクラスメイトに、男子クラスの生徒が、「おまえらは可愛くないけどな」[84]、「ブスの朝礼ご苦労さん」[84] などと馬鹿にする。

女子クラスの生徒たちは、男子から嫌な言葉を投げかけられた際には徹底して無視するというルールを決めたが、それでも、男子の攻撃に反応してしまう。そのような自分たちを、「修行が足りないね、わたしたち」[84] などと言って反省する。その反省は、少女漫画への批判へとつながる。

彼女たちは、少女漫画によくある場面で、女の子のことを「ブス」「ブ

ス」と言っていた男の子が、ある日、「おれはほんとうのブスにはブスと言ったことがない」[84]と明かし、それを聞かされた女の子が「頬を染めたりして、何かすごくいいことを聞いたみたいな反応をする」[85]が、そのようなことは、到底、理解できないと口々に主張する。なぜならば、「ほんとうのブスに向かってであろうがなかろうが、他人に面と向かってブスと言った時点でその男は最低な奴だから見直したりしないし」[85]、「ブスって言う時の男が〈どうだ、傷つくだろう〉って顔しているのがいや」[85]だからである。「ブスって言われることより、あの卑しい顔が」[85]いやだと言うのである。

この会話は、『最愛の子ども』の冒頭に挿入された真汐の作文と同様、女子高校生たちが、あらゆる方法で唯一で絶対の規範であるかのように宣伝される異性愛至上主義の目的を理解していることを端的に示すものである。なつかない小動物をいたぶってのぼせた顔をしたおじさんたちと、「どうだ、傷つくだろう」と女性をいたぶる「卑しい」男たちは、イコールである。彼女たちは、あらかじめ女性を、男性とは異なる、容易には飼いならされない小動物としかみなさない異性愛など、理解しようとは思わない。

しかし、だからといって、彼女たちの未来に異性愛という選択肢が想定されていないわけではない。

日夏は、自分の性アイデンティティは未確定だと主張する。日夏の主張をもっともだと理解するクラスメイトたちも、性的に自由だ。

日夏は、自分は「どんな相手に好意を抱きどんな相手とどんな性行為をするんだろう」[146]と近い将来の自分に希望を寄せる。どのような相手か、今の時点では想像できないが、「性行為をしないという選択肢はなく、絶対にするつもり」[146]だと、意欲をみせる。

日夏だけではない。空穂は、二十歳になったら「SMバーにもレズビアン・バーにもハプニング・バーにも行って世の中と自分を探求する」[201]と豪語する。

親世代である花世は、自分の性アイデンティティを自分で規定することがかなり困難な時代にいたがゆえに、日夏のように、自身の性アイデンティティを「未確定」にすることができなかった。そして、その花世世代

は、日夏にエールを送る。

性体験もなく、自身の性的指向も未確立の高校生たちが、性別二元制に基づいて女性に消費財としての商品価値を強いる社会において、『ナチュラル・ウーマン』世代の大人たちの理解と協力を得ながら、主体的に自らの人生を切り開いていこうとする希望が、『最愛の子ども』に込められている。

おわりに

攻撃性を男性の、受容性と協調性を女性の本質的特徴であるかのような言説が、日常生活のあらゆるシーンで見受けられる。

しかし、それは、いわゆる「男女関係の神話」[ファイン&エルガー 2018]であり、「ほとんどの人のジェンダーはモザイク」[デンワーズ 2018 (2017) : 16] だということが、最近の研究で明らかになった。

ラテンアメリカ研究者である筆者が、ラテンアメリカとは関係なさそうな本論文を執筆することを奇妙に思われるかもしれない。しかし、日本に住んでいる限り、自分の身の回りで起こっている奇妙な現象に無関心でいることはできないし、加えて、ラテンアメリカ的な視座から日本を見ると、余計に、日本の奇異な特徴に敏感にならざるを得なくなる。

ラテンアメリカではカトリックの規範が社会の根底にあり、「男は男らしく、女は女らしく」という倫理観が非常に強く人々の行動に影響している。しかし、そのラテンアメリカでも最も保守的な国と言われ、21世紀になってようやく離婚や中絶が合法化されたチリは、2015年に同性婚を認めた。2006年にチリで初の女性大統領に選出されたミシェル・バチェレ (Michelle Bachelet : 任期2006～2010年、2014～2018年) が二期目の大統領を務めたときである。ちなみに、バチェレ大統領はチリ大学医学部を卒業している。

冒頭に挙げたように、日本では女性議員ですら、女性を人格のない「産む機械」だとみなして、社会から切り離された家庭に閉じ込めようとし、責任が重く、高収入な職業へのアクセス権を女性から奪おうとする。対す

るチリでは、初の女性大統領に就任したバチェレが、閣僚の半数を女性にした。

あたかも本質的特徴であるかのように思われてきた概念が、実は、社会的構築物であると告発するのは、人類学者の責務である。告発によって、既存の規範に違和感を覚える人々を救うことができれば幸いであるし、少なくとも、既存の規範に馴染んでいる人も、そうでない人も、もっと自由に、自分らしく生きることができるようになれば良いと願っている。

文献リスト

- 今田絵里香 2019 『〈少年〉〈少女〉の誕生』 ミネルヴァ書房
- 上野千鶴子 2009 「〈セクシュアリティの近代〉を超えて—〈異性愛秩序〉をゆるがす」
上野千鶴子・江原由美子他編『新編 日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』
1-46頁 岩波書店
- 江原由美子 2009 (1994) 「〈セクシュアル・ハラスメントの社会問題化〉は何をしていることになるのか?—性規範との関連で」 上野千鶴子・江原由美子他編『新編 日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』 109-132頁 岩波書店
- 掛札悠子 2009 (1992) 「〈レズビアン〉とはだれか」 上野千鶴子・江原由美子他編『新編 日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』 89-103頁 岩波書店
- 田中玲 2009 (2006) 「なぜトランスジェンダーフェミニズムか」 上野千鶴子・江原由美子他編『新編 日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』 279-303頁 岩波書店
- 塚田幸光 2010 『シネマとジェンダー—アメリカ映画の性と戦争』 臨川書店
- デンワーズ 2018 (2017) 「男女の脳はどれほど違う?」 別冊日経サイエンス『性とジェンダー：個と社会をめぐるサイエンス』 14-19頁 日経サイエンス社
- ハルバーシュタム、ジュディス (高橋愛訳) 2008 「女の男性性—歴史と現代」 竹村和子編『欲望・暴力のレジーム—揺らぐ表象／格闘する理論』 142-153頁 作品社
- バトラー、ジュディス (竹村和子訳) 2008 「ジェンダーをほどく」 竹村和子編『欲望・暴力のレジーム—揺らぐ表象／格闘する理論』 171-186頁 作品社
- ファイン&エルガー 2018 「男女関係の神話」 別冊日経サイエンス『性とジェンダー：個と社会をめぐるサイエンス』 8-13頁 日経サイエンス社
- 堀あきこ 2018 「〈からかいの政治〉2018年の現在」『現代思想』(特集：性暴力=セクハラ) 2018年7月号 178-189頁 青土社
- ポロック、グリゼルダ (中嶋泉訳) 2008 「性のヴィジョン—仮想フェミニズム美術館逍遥—1920年代を中心に」 竹村和子編『欲望・暴力のレジーム—揺らぐ表象／格

闘する理論』 45-68頁 作品社

松浦理英子 1987 『ナチュラル・ウーマン』 河出文庫

松浦理英子 (インタビュー) 2015 「セクシュアリティの自己実現のために」『すばる』
37(10), 193-199頁 集英社

松浦理英子 2017 『最愛の子ども』 文芸春秋

三橋順子 2009 (2007) 「往還するジェンダーと身体」 上野千鶴子・江原由美子他編
『新編 日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』 304-313 岩波書店

村井まや子 2016 「スウィング・シックスティーズの脱神話化：アンジェラ・カー
ター『ラブ』再訪」 神奈川大学人文学研究所編・小松原由理編著 『〈68年〉の性
—変容する社会と「わたし」の身体』 91-117頁 青弓社

山口ヨシ子 2016 「幽閉されるアメリカン・ヒロイン—19世紀末から1960年代へ」 神
奈川大学人文学研究所編・小松原由理編著 『〈68年〉の性—変容する社会と「わ
たし」の身体』 17-61頁 青弓社

瀧井朝世による松浦理英子へのインタビュー記事 2017/04/29付 文春オンライン
<http://bunshun.jp/articles/-/2312>

<http://bunshun.jp/articles/-/2315>

萩原まみによる松浦理英子へのインタビュー記事 2008年5月 Tokyo Wrestling(Web
マガジン)

http://www.tokyowrestling.com/articles/2008/08/matsuura_rieko4.html

佐々木浩久 (監督) 1994 『ナチュラルウーマン』

野村誠一 (監督) 2010 『ナチュラル・ウーマン2010』